



『ほあああつっ  
イグツッイグツッ  
もう射精ないって言ってるのを  
また射精するううううっっっ』

『ほいー♥  
8発目え♥  
ほーらおちんちん  
気持ちいいねえー♥』

ホ  
ウ



「ほれほれほれほれほれえ  
まだでんだるー?♡  
15回目ぐらいから潮しか吹いてねえぞ、  
腰ガクガクさせて♡ 試験官なら  
もう10発ぐらい余裕っしょ♡」



『大鳳うずら、最終試験通過、か』



『ふむ』

『なるほど』



『この歳で子供がいるのか』

『おい、誰でもいい大鳳うずらの過去のデータを集める』

『いい情報を持ってきたものには「目つき」きりで世話をしやる』

『ぞおおおおおー!!』



『せ、先生……っ!!  
だ、だめですっ!  
あたし……っこんなつもりじゃ……っ』

『そ、それは……っ』

『いいだる大鳳っ  
お前も望んでたんだろっ?』

『それに、もうみんな帰ったし  
ここには誰もこない』

『そ、そういう問題じゃ  
ないです先生え……っ』

『大鳳っ、俺、お前のことが  
好きなんだよ、もう我慢の限界なんだ、大鳳っ!!』

『こ、こよなっ…』

「ん」



『あああああ  
はいったいはいったい大鳳っ!!』

『はいっ♡ほ……っ♡  
せんせつあたしっ嬉しいっ♡』

『ああ、俺も嬉しいよ大鳳っ!  
気持ちよすぎて腰がとまりねえ!!  
このまま一回出すぞっ!!』

『せんせつ中はっ  
申はだめですっ!!  
赤ちゃんっできちゃうっ!!』

『いいなあ、大鳳っ  
俺の赤ちゃん産んでくれえっ!!』

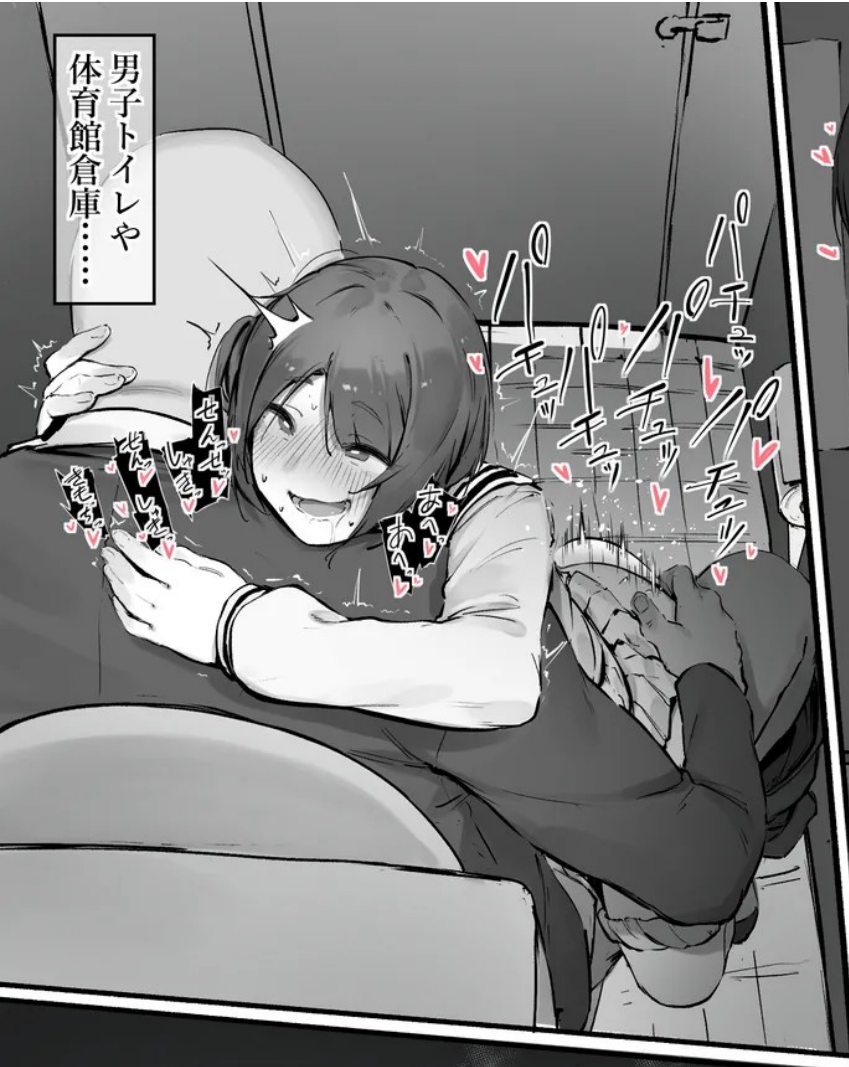
『そん……っ  
せんせつだめ……っ♡』



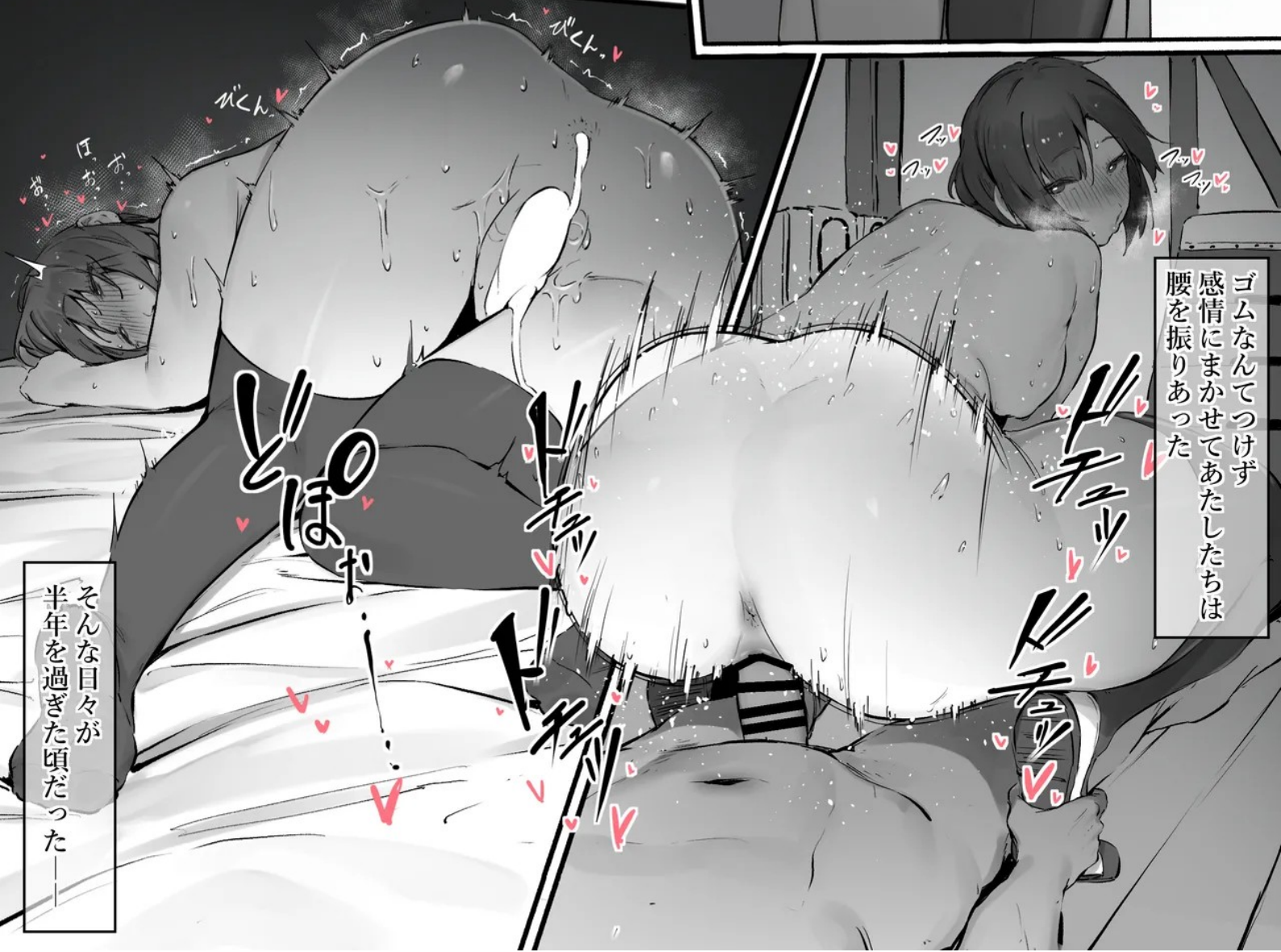
『んほおお  
おおおお』



男子トイレや  
体育館倉庫……



それからというもの  
あたしと先生は  
場所なんておかまいなくセックスした



ゴムなんてつけず  
感情にまかせてあたしたちは  
腰を振りあった

そんな日々が  
半年を過ぎた頃だった――











宿直室







